

接頭辞 over- の付加と項の継承について

加 賀 信 広

1. はじめに

動詞に付く接頭辞 over- と前置詞用法の over が一定の関係を有していることは、次のようなパラフレーズが有効であることをみれば、否定できない事実であると思われる (Yumoto 1997, 由本 2005, など)。

- (1) a. overrun the line = run over the line
- b. overleap the fence = leap over the fence
- c. overfly the territory = fly over the territory
- d. overgrow the garden = grow over the garden

しかしながら、このようなパラフレーズ関係が常に成り立つかという点、そうではなく、次のような事例では、接頭辞 over- の意味を前置詞の over で書き換えることはできない。

- (2) a. overbuild the city
- a' #build over the city
- b. overdraw the account
- b' *draw over the account

(2a) は「家などを建て過ぎて、町を建物でいっぱいにする」ほどの意味であるが、この意味を (2a') のように表現することはできない。¹ 同様に、(2b) は「口座からお金を引き出し過ぎる」の意であるが、前置詞 over を用いた (2b') は不可能である。

このようなパラフレーズが可能か否かの問題は、いわゆる接頭辞付加にかかわる項の継承 (inheritance) の問題として捉えることができるが、小論では、接頭辞 over- に絞って、どのような場合に項の継承が可能となり、どのような

場合に不可能となるかについて、先行研究の批判的な検討を含めて、考察することにした。

2. 接頭辞の付加と項の継承

先行研究の検討に入る前に、もう少し具体的な事例をみておくことにしよう。接頭辞の付加を動詞派生のプロセスとして捉えると、(1)の各例では、基体となる動詞が自動詞で、その自動詞が従える前置詞句の主要部である *over* が接頭辞となり、*over-V* が派生されるパターンとなっている。この場合、前置詞 *over* の目的語がそのまま派生動詞 *over-V* の目的語になるという意味で、項の継承があると考えられる。このパターンの例としては、他に次のようなものがある。

- (3) a. The river overflowed (=flowed over) its banks.
- b. Trees overhang (=hang over) our walk.

基体となる動詞が他動詞の場合もある。たとえば *overshoot* や *overthrow* であるが、これらの動詞は、(4)にみるように、目的語として場所をとることができるが、移動物をとることはない。これは、基体動詞が(5)のような目的語と前置詞句を従えるパターンをもつことを踏まえれば、やはり前置詞の項を継承する事例であることになる。

- (4) a. They overshoot {the target/*the missile}.
- b. The infielder overthrew {first base/*a ball}.
- (5) a. They shot the missile over the target.
- b. The infielder threw a ball over first base.

一方、(2)の例は、対応する前置詞表現が存在しないという意味で項の継承がない事例である。他に項の継承がない例としては、場所格交替を示す *load* タイプの動詞を挙げることができる。このタイプの動詞は、よく知られているように、接頭辞 *over-* が付くと目的語として場所をとるパターンだけが許され、移動物を目的語とするパターンは不可能となる。

- (6) a. overload the ship (with freight)
- b. *overload freight onto the ship
- (7) a. overstuff the bag (with papers)
- b. *overstuff papers into the bag

(8) にみるように、基体動詞の load と stuff は、over を主要部とする前置詞句をとることは、不自然あるいは不可能であるので、(6a) と (7a) に関しては項の継承がないと考えられる。

- (8) a. #load freight over the ship
- b. *stuff papers over the bag

また、overheat や oversimplify などの場合は、基体動詞の目的語がそのまま派生動詞の目的語に引き継がれるので、一見、項の継承がある事例のように思われるが、前置詞あるいは小辞 (particle) の over が基体動詞と結びつく用法は存在しないので、本論の観点からは、やはり項の継承のない事例となる。

- (9) a. (over)heat the room
- b. (over)simplify the rule
- (10) a. heat (*over) the room (*over)
- b. simplify (*over) the rule (*over)

さらに、接頭辞 over- が付くことで他動詞が自動詞化する例として有名な overeat に関しても、基体動詞が前置詞ないし小辞の over をとることはないので、項の継承のない事例とみなされることになる。

- (11) a. Mary overate (*apples).
- b. Mary ate (*over) apples (*over).

3. 先行研究の検討

接頭辞 over- に関する先行研究としては、Lakoff (1987) のメタファーに基づく分析や Sugioka (1985) の形態統語論を枠組みとする議論などが目につくが、

最近の研究として、Yumoto (1997) および由本 (2005) がまとめた論考を提示している。ここでは、由本 (2005) を中心に、彼女の接頭辞 *over-* の扱いを簡単にまとめ、その問題点を指摘することにした。

由本はまず、接頭辞 *over-* には ‘above/across’ という空間的意味と ‘over or beyond in degree or quantity’ という程度に関する意味の2つの意味があるとする。そして、後者の「過剰」の意味は、前者の「～を超えて」の意味からの比喩的拡張によって生じたものであると考えている。このような発想に基づき、由本は空間的な *over-* の接辞化と「過剰」の *over-* の接辞化をそれぞれ次のような語彙概念構造 (LCS) を用いて表示することを提案した。

- (12) $V : [...[[x] GO_{[path \dots [place P [y]]}]] \rightarrow$
 $over-V : [...[[x] GO_{[path \dots TO [place OVER [y]]}]]$
 (13) $V : [...[BECOME [[y] BE_{[place P [y]]}]] \rightarrow$
 $over-V : [...[BECOME [[y] BE_{[place OVER [y]]}]]$

具体例に当てはめると、たとえば空間的移動を表す動詞 *run* への接辞化は (14) のように表される。

- (14) $run : [x GO_{[path TO [place [y]]}] \rightarrow$
 $overrun : [x GO_{[path TO [place OVER [y]]}]$

ここでは、着点を表す Place の要素として OVER という意味が指定され、あるところ (たとえば the line) を「超えたところ」までの移動という意味が表現される。他動詞を基体とする overshoot の場合には、CAUSE 関数が加わり、以下のような表示になるが、あるところを「超えたところ」までの移動が表現されるという点では同様である。

- (15) $shoot : [x CAUSE [z GO_{[path TO [place [y]]}]] \rightarrow$
 $overshoot : [x CAUSE [ARROW GO_{[path TO [place OVER [y]]}]]$

一方、「過剰」の意味の *over-* については、たとえば *overheat* の場合は、(16) のような表示が与えられる。

- (16) *heat* : [x CAUSE [BECOME [y BE_{ident} [place AT [property HOT]]]]] →
overheat : [x CAUSE [BECOME [y BE_{ident}
[place OVER [property HOT]]]]]

状態変化動詞の *heat* では、Place のとる項が Thing (もの) ではなく Property (属性) になるが、接頭辞 *over-* が付くと、場所関数が AT から OVER に替わることにより、「暖か過ぎる」の意味が表現されるという仕組みである。(16) の表示は、接頭辞 *over-* の意味が場所関数 OVER で表されているという点で、(14) ないし (15) の表示と平行的である。「過剰」とは「ある限度を超えている」という意味であることを踏まえれば、由本のこの定式化は認知的観点からも納得できると思われる。

しかし、(16) の表示に問題はないであろうか。(16) の上段の [y BE_{ident} [place AT [property HOT]]] の部分は、「(部屋が) 暖かい」ことを表している。すなわち「暖かい」とは、「(部屋が) 暖かい (HOT) という属性の領域にある」という捉え方である。(16) の下段では、「暖か過ぎる」の意味が [y BE_{ident} [place OVER [property HOT]]] と表示されている。素直にこれを解釈すれば、「(部屋が) 暖かいという属性を超えた領域にある」ということになるが、「属性を超えた領域」とはどういう領域なのであろうか。「暖かい」という属性から「はずれた」あるいは「離れた」領域なのであろうか。しかし、「暖か過ぎる」というのも「暖かい」ことに変わりがないことを思えば、「暖かい」という属性の「外に出る」という解釈になってしまっただけでは困るのは明らかである。

この点に関して由本は、[place OVER [property HOT]] における HOT が表しているのは、単なる属性ではなく、「HOT で表される属性概念の標準値」であると考えることにより、問題を解決しようとする。すなわち、(16) の下段の概念構造は「HOT という属性の基準を超えた状態まで変化が行き過ぎてしまう」ことを表していると解釈する。しかしながら、どのような場合に、この「基準」なり「標準値」なり (あるいは「限度」なり) の解釈が出てくるのか、あるいは許されるのかが明らかにされていない。そのため、由本のこの解決案は、今のところ、その場しのぎの一策に終わっているとの印象を受ける。

同様の問題は、*overbuild* の分析についても生じてくる。由本 (2005) は、この動詞に対して次のような表示を与える。

- (17) *overbuild* : [x CAUSE [BECOME [BUILDING] BE [OVER y]]]

ここでは、[OVER y] の部分が問題であるが、これに関して由本は次のように述べている。「OVER を物理的な場所として解釈すれば「～の上を覆うように建てる」という意味になるが、これを目的語の収容能力を表わす抽象的意味として解釈すれば「～の上に過剰に建てる」という意味になる。」しかしながら、[OVER [THE CITY]] という表示に「町の収容能力を超える」という解釈を許すのであれば、前置詞 over を含む次の文にも「過剰に家を建てる」の意味が出てよいことが予測される。この文の概念構造はやはり (17) のようなものになるからである。

(18) They built houses over the city.

しかし、事実はそうではない。(18) は「町中に(くまなく)家を建てる」の解釈は許しても、「過剰」の意味に解釈することはできない。詰まるところ、目的語が「収容能力を表わす抽象的意味」をもちうるのはどのような場合か、また (18) のように前置詞句表現として現れた場合はなぜその抽象的意味で解釈できないのか、などの問題にしっかり答えることができないと、由本の説明は説得力のあるものにならないように思われる。

さらに深刻な問題が *overdraw* という動詞に関して生ずるように思われる。たとえば *overdraw the account* という表現に対応する概念構造がどのようなものかについて、由本 (2005) では取り立てた考察は行われていないが、彼女の分析に従うと、ほぼ次のような形になることが予想される。

(19) *draw* : [x CAUSE [z GO [path FROM [place [y]]]]] →
overdraw : [x CAUSE [MONEY GO
[path FROM [place OVER [y]]]]]

動詞 *draw* は「引き出す」のであるから、経路の関数に FROM をたてることにすると、問題はやはり [path FROM [place OVER [y]]] の部分にあることになる。口座を物理的な場所として解釈する「口座の上を覆うようなところから」という意味はここでは問題外であるが、口座の「収容能力」に着目したとしても、「口座の容量 (capacity) を超えたところからお金を引き出す」というのでは訳が分からない。「過剰」であるのは、引き出されるお金の量の方であり、関数としての OVER が口座あるいは口座の容量をとるという定式化は適切ではないと

考えられる。

同様の問題は、load タイプの動詞や eat に over- が付いた事例でも生じてくる。由本 (2005) では、overload に対して (20) のような概念構造が与えられた。²

(20) *overload* : [x CAUSE [BECOME [y BE [OVER LOADED]]]]

ここでは、結果状態を表す属性 (LOADED ‘荷を積んだ状態’) が OVER の項になっており、「その属性の基準を超えた状態まで変化が進む」という解釈になると考えられている。しかし、overheat の例で考察したように、どうしてこの場合に「基準」の解釈が出てくるのかは今のところ不明である。また、overeat に関しては、(21) のように随意的に主語と同一指標をもつ再帰代名詞が現れることを手掛かりに、「自己の容量や能力を超える」という意味から「過剰」の解釈が出てくると考えられている。

(21) Mary overate (herself).

しかし、overbuild や overdraw の事例で指摘したように、(21) の herself がなぜ「自己の容量や能力」の解釈になるのかに関しては、十分な説明は与えられていないと言わざるを得ない。

4. 項の継承と接頭辞 over- の解釈

前節までの議論で次のことが明らかになったと思われる。まず、接頭辞 over- に関して項の継承がみられるのは、over- が「～を超えて」や「～を覆うように」などの空間的解釈をもつ場合である。前出の (1) の例で確認すると、(1a-b) が「～を超えて」の例であり、(1c-d) が「～を覆うように」の例である。

- (1) a. overrun the line = run over the line
- b. overleap the fence = leap over the fence
- c. overfly the territory = fly over the territory
- d. overgrow the garden = grow over the garden

一方、「過剰」の意味をもつ over- の場合には、いずれも項の継承はみられない。

これは、(2) の例 (再掲) および 2 節の (6) から (11) の例で確認したことである。

- (2) a. overbuild the city
- a' #build over the city
- b. overdraw the account
- b' *draw over the account

次に、3 節の議論から、由本 (2005) の語彙概念構造に基づく分析では、空間的解釈の over-V に関する表示には問題がないが、「過剰」の解釈をもつ over-V の表示にはいずれも問題があることが分かった。

まず前者について考えると、なぜ空間的解釈をもつ場合に項の継承がみられるかという点、その理由は自明であろう。すなわち、前置詞 over にその空間的解釈が存在するからである。前置詞 over は、目的語に点や線など一次元の存在物とみなされるものをとった場合に「～を超えて」の解釈となり (22)、二次元の平面とみなされるものをとった場合に「～を覆うように」の解釈となる (23)。

- (22) a. run over the line
- b. leap over the fence
- (23) a. fly over the territory
- b. grow over the garden

この空間的解釈の前置詞 over が (一定の操作により) 接頭辞として動詞と結びつくと、空間的解釈をもつ over-V が派生されることになる。この場合に、前置詞から派生動詞への項の継承が生ずるというわけである。

ここで、over-V が「過剰」の解釈をもつとき、その目的語にはどのような要素が現れているかを考えてみよう。結論を先に述べると、「過剰」の解釈をもつ場合の目的語には、三次元の存在物とみなされるものがきていられると思われる。すなわち、立体的なものであり、さらに言えば、容器と見立てることができるものである。いくつかの例で確認してみよう。まず、load タイプの動詞を基体とする over-V では、目的語にくるものが容器の機能をもつものであることは明らかである。そこに物を載せたり、詰め込んだりすることになるからである。

- (24) a. overload the ship (with freight) (=6a)
 b. overstuff the bag (with papers) (=7a)

次に, overbuild や overdraw の場合にも目的語になるものは, そこに家が立ち並んだり, お金が蓄えられたりするという意味で, 容器と見立てることができる。

- (25) a. overbuild the city (=2a)
 b. overdraw the account (=2b)

多少問題となるのは, overheat などの場合かもしれない。つまり, overheat the room の the room が容器の機能をもっているかどうか, という問題であるが, これに関しては次のように考えることができる。「部屋が暖かい」というのは, 部屋に一定の熱量が存在するということであり, 「部屋を暖める」というのは, 部屋に熱量を加えることである。この見方が妥当であるとする, この場合, 熱量に対して部屋は「容器」の機能を担っていることになる。さらに, oversimplify the rule のような事例に関しても, 加賀 (2001) ないし Kaga (2005) で提案した状態変化プロセスの分析を踏まえれば, overheat の場合と同様な考え方が成立する。すなわち, 状態変化とは, その主体が「場所」の役割をもち, 「属性」ないし「特性」を得る (あるいは, 失う) プロセスであるとする分析に拠れば, simplify the rule が表す変化は, 目的語が simple という属性を獲得するプロセスであり, この捉え方下では, 抽象的な意味で the rule はその属性に対して「容器」の機能をもつと考えることができる。また, 動詞 overeat の場合には, もし目的語として再帰代名詞が現れれば ((21)を参照), それは食べ物が入ってゆく場所を表しており, まさに「容器」の機能をもつと言える。

このように, 「過剰」の意味をもつ over-V の目的語となるのはいずれも「容器」と見立てることができる三次元存在物である。そうであるとする, 「過剰」の解釈をもつ over-V が項の継承を受けないのも, また自明の理である。なぜなら, 前置詞の over には三次元の立体物をとる用法がまったく存在しないからである。これは, in the box の in や through the pipe の through など立体物をとる前置詞とのはっきりとした相違である。このように考えてくると, 由本 (2005) の分析の問題点もさらに明確となってくる。由本は, たとえば「過剰」の解釈をもつ overbuild の分析において, 三次元の物体を関数 OVER の下に置

いているが、この組み合わせにはそもそも経験的ないし概念的な動機付けがほとんどないように思われるのである。

(26) *overbuild the city* :

[x CAUSE [BECOME [BUILDING] BE [OVER THE CITY]]]

そうすると問題は、結局、接頭辞 *over-* の「過剰」の意味はどこから生まれてくるのかという点に行き着くと思われる。この問題に対して本論で十分な答えを用意することはできないが、その手掛かりとなりそうな事例について考えておくことにしたい。前置詞 *over* には、目的語に数量を従えて「～以上の (*more than*)」と解釈される用法がある。次のような文に現れている *over* である。

(27) a. Children *over* the age of 12 must have full-price air tickets.

b. Most of the carpets are *over* \$100.

c. She did it for *over* a week.

また、目的語に限度 (*limit*) を表す名詞句をとり、やはり「～以上の (*more than*)」と解釈される場合もある。

(28) a. I've gone *over* my overdraft limit.

b. They are already \$25 million *over* budget.

「過剰」の意味の接頭辞 *over-* にもっとも近いのは、この「～以上」の意味をもつ前置詞 *over* であると思われる。ここで注意すべきは、この用法の *over* が従える目的語は、一定の数値ないし限度を表す名詞句であり、いずれも点として捉えられる性質をもっているということである。この用法の前置詞 *over* はどのような形で「過剰」の解釈をもつ接頭辞 *over-* と関係をもつのであろうか。

3 節でみたように、由本 (2005) は「暖か過ぎる」という状況に対応する概念構造として、HOT という属性が関数 OVER の項となっている、次のような表示を仮定した。

(29) … [place OVER [property HOT]]

しかし、HOT という属性は、「少し暖かい (a little hot)」段階から「たいへん暖かい (very hot)」段階までスケール的な拡がりをもっているので、OVER の項として据えられたときに、「～を超えて」の解釈が素直には出てこないという問題が生じてしまう。由本はこの問題を解決するために、「属性概念の標準値」という考え方を導入して、(29) の表示は「HOT という属性の基準を超えた状態まで」という解釈を受けるとした。ここから「過剰」の意味が生まれると考えたわけである。

しかし、これとは別の行き方があるように思われる。以下のように HOT と OVER を逆転させる分析である。

(30) … [property HOT [OVER [z]]

ここでの OVER は、(27) あるいは (28) に現れる「～以上の」の意味の前置詞 over に対応すると考える。したがって、z には一定の数値なり限度なりが入ることになり、全体として「一定の数値・限度を超えた HOT な状態」という解釈を受けることになる。由本の表示を借用して、(30) を *overheat* 全体の概念構造に埋め込むと、(31) のようになる。

(31) *overheat* : [x CAUSE [BECOME [y BE [property HOT [OVER [z]]]]]]

この表示において、y は暖められる主体であり、z は発話の状況下で了解される「適正な温度」であると考えことにしよう。そうすると、たとえば *overheat the room* という表現をこれに当てはめて解釈すると、「部屋を適正な温度以上に HOT な状態にする」すなわち「(容器としての) 部屋に一定量以上の熱量を加える」という「過剰」の意味が読み込まれることになる。

このように考えると、一応、「過剰」の意味の接頭辞 over- も前置詞 over の用法に関係付けることができるように思われる。ただし、この場合に想定されている前置詞 over の目的語にくるのは、「適正な温度」という意味的ないし語用論的に了解される要素であり、統語的に具現化される要素ではないので、項の継承という観点からすると、依然として、項の継承はみられないことになる。

ここでの分析を他の動詞、たとえば *overload* に当てはめると、(32) の表示が得られ、適切な「一定以上に荷が積み込まれた状態にする」という解釈が出てくると思われる。

(32) *overload* : [x CAUSE [BECOME [y BE [LOADED [OVER [z]]

さらに, *overbuild* や *overdraw* に対しても同様の分析を行なうことが考えられるが, これについては稿を改めることにしたい。なぜなら, *overheat* や *overload* は HOT や LOADED という属性の程度が「過剰」であるという意味であるが, 一方の *overbuild* や *overdraw* の場合には, 建物やお金の量の「過剰」が問題とされるため, 多少とも異なった定式化が必要になるためである。また, 本論は由本 (2005) の語彙概念構造のアプローチに従って議論を進めたが, 加賀 (2001) ないし Kaga (2005) の統語論的な枠組みの下でどのように分析されるかについても, 稿を改めて論ずることにしたい。

5. まとめ

本論では, 接頭辞 *over-* の付加について項の継承という観点からデータを整理し, *over-* が空間的意味をもつ場合には項の継承がみられるが, 「過剰」の意味の場合には項の継承がみられないことを確認した。また, 由本 (2005) の分析は, 項の継承のない「過剰」の意味の *over-* の場合に問題が含まれていることを指摘し, 最後に, その問題点の解決の方向性を示唆した。

注

- 1 (2a') は「町全体にくまなく (家を) 建てる」の意味に解釈される可能性はあるが, それは (2a) の「過剰」の意味とは別の解釈である。3 節の議論を参照されたい。
- 2 They overloaded the ship with freight. などの文における with 句は, 付加詞と特徴付けられる。便宜上, (20) の構造には含められていない。

参考文献

- Hasebe, Ikuko (2004) "Over- + V in English and compound verbs in Japanese," *English Linguistics* 21, 1-33.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館, 東京。
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. MIT Press, Cambridge, MA.
- 加賀信広 (1999) 「りんごはなぜ食べ過ぎられないか」『筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書Ⅱ』(平成 10 年度), 筑波大学, 67 ~ 74 頁。
- 加賀信広 (2001) 「意味役割と英語の構文」『語の意味と意味役割』(英語学モノグラフシリーズ第 17 巻), 研究社出版, 東京, 87 ~ 181 頁。

- Kaga, Nobuhiro (2005) *Thematic Structure: A Theory of Argument Linking and Comparative Syntax*. Doctoral dissertation, University of Tsukuba.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』(日英語比較選書 8) 研究社出版, 東京.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. University of Chicago Press, Chicago.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar II: Descriptive Application*. Stanford University Press, Stanford.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press, Cambridge, MA.
- Sugioka, Yoko (1985) *Interaction of Derivational Morphology and Syntax in Japanese and English*. Garland.
- Yamada, Shoichi (2000) "A semantic study of the prefix *over-* and the norm of evaluation," *Tsukuba English Studies* 19, 65-80.
- Yumoto, Yoko (1997) "Verbal prefixation on the level of semantic structure," Kageyama, Taro ed. *Verb Semantics and Syntactic Structure*. Kurosio Publisher, Tokyo, 177-204.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』ひつじ書房, 東京.